興祖微妙大師（授翁宗弼禅師）の御生涯

興祖微妙大師（授翁宗弼禅師）は、妙心寺の開山無相大師（関山慧玄禅師）のただ一人の後継者です。もとは後醍醐天皇の忠臣である萬里小路藤房卿とされ、出家したのは 39 歳のことでした。

出家後、微妙大師は約 20 年にわたり、各地を行脚して修行を重ねました。後に無相大師に参じ、その厳しい指導により 61 歳でお悟りを開かれています。

それから数年後のこと、無相大師は風水泉という井戸のほとりで微妙大師に最期の教えを伝えて逝去。これに伴い微妙大師は 65 歳で第二代の妙心寺住職に就任します。そして 76 歳、無因宗因禅師を正式の後継者に育て上げ、北朝の康暦 2 年（南朝の天授 6 年・1380）3 月 28 日、85 歳で亡くなります。同年妙心寺に塔所（墓所のこと）として天授院（現在本派の修行道場）が開創されました。また、滋賀県三雲の妙感寺には師の墓塔があり、微妙大師がこの地で亡くなった証しとされています。

微妙大師は、無相大師の唯一の後継者として妙心寺の草創期を支え、妙心寺の基盤を築きました。「興祖」という尊称はその功績を称えてつけられたものです。無相大師と同じく語録はありませんが、「少水の魚に楽しみ有り」という教えが今に伝えられています。